

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 オノマトペの言語的統合性に関する日韓対照研究

氏 名 朴 智娟

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 第 1 章 序章

本論文の目的は、日本語と韓国語のオノマトペ（例：「きらきら」、*panccakpanccak*<きらきら>）を対象に構文的特徴に注目し、その言語的統合性を考察することである。これにより、統合性を測定する尺度の設定や、その尺度と相関する諸言語的特徴の提示、言語間における統合性の差を明らかにすることを目的とする。また、日韓両言語の比較を通じ、日本語より韓国語の方が、形態統語的・語彙的統合性が高いことを示す。

言語的統合性とは、オノマトペが言語体系にどれほど組み込まれているのか、すなわち、オノマトペがある言語体系においてどのような位置づけとなっているのかを指すものである。本研究では、オノマトペの言語的統合性を、形態統語的統合性を中心に測定する。本論文でいう形態統語的統合性とは、オノマトペが節構成上においてどれほど中核的な存在であるのかを指すものである。具体的に言うと、オノマトペが述語化接尾辞と結合し動詞や形容詞といった述語形式が形成できるのか（統語的統合性）、オノマトペが述語化接尾辞と強固に結びつき、形態的に1つのユニットが形成できるのか（形態的統合性）といった観点より測られる性質をいう。本論文では、オノマトペの形態統語的統合性を、文法的生起可能性（第3章と第4章）と各母語話者の日常会話のデータ（第5章と第6章）という2通りの観点より考察することで、これまでの研究で、当該の課題を包括的に取り上げる。

### 第 2 章 基本概念

本章では、オノマトペの意味と統語に注目する本論文の課題を理解するために知っておくべき基礎として、オノマトペに関する用語、定義、意味の下位分類を概説し、更に類像性と音象徴について導入を行う。本章で概説する内容は、オノマトペの定義、意味の下位分類（擬音語、擬態語、擬情語）、類像性 (iconicity)、音象徴 (sound symbolism) である。擬音語は音を表すもので（例：「びよびよ」、*ppiyakppiyak*<びよびよ>）、擬態語はものの様態を表すものである（例：「ぐるぐる」、

*teykwulteykwul* <ぐるぐる>。擬情語は内部感覚や心情などを表すものである（例：「そわそわ」、*singswungsayngswung* <そわそわ>）。

類像性は、表すもの（形式）と表されるもの（意味）の類似性と定義づけられ (Peirce 1932)、大きく「絶対的類像性」と「相対的類像性」の2つに分かれる (Dingemanse et al. 2015)。絶対的類像性とは、形式と意味が極めて類似し、一対一の対応関係を成す直接的関係のことをいい、言語表現においては、音や声を模倣する擬音語がこれに当たる。相対的類像性における形式と意味の関係は、類似の特徴を持つ複数の形式が、類似した意味を表すという特定の形式の集まりと意味の間における体系的、構造的な相応関係を指す。

最後に音象徴とは、一般的にはある音が特定の意味またはイメージを想起する現象をいうが、本論文では、オノマトペにおける音象徴の意味を、音韻的意味と形態的意味の2つの側面からなるものと捉える。音韻的特徴における意味は、日本語では清濁音の対立と語中における位置によって、韓国語では2項対立の母音体系と3項対立の子音体系の対立によって表す。形態的特徴における意味は、日本語では語根の重複（完全重複形）、強調接中辞「ッ」「ン」、接尾辞「ッ」「ン」「リ」「イ」の添加という3つの要素によって表し、韓国語では重複（完全重複、部分重複）と語末子音の添加という2つの要素によって表す。

### 第3章 オノマトペの動詞化に関わる複数の意味素性

本章では、日韓オノマトペの述語用法の中で動詞用法に焦点を当て、動詞化に関わる意味的な諸要素を提示し、これらの要素が両言語のオノマトペの動詞化にどのように関わっているのか、その優先順位はどうなっているのかを明らかにする。本章では、オノマトペの動詞化を左右する要素として、聴覚性 (audibility)、継続性 (durativity)、他動性 (transitivity)、評価性 (evaluativity) の4つの意味素性を設定する。これらの4つの要素は、両言語間でそれぞれ異なる振る舞いを見せる。両言語は音性、継続性、評価性の要素を共有しつつ、日本語ではこれらに加え、他動性が働く。一方、韓国語では *-tayta* 動詞に話者の否定的な評価性が更に働いている。具体的に言うと、日本語では、オノマトペ動詞化を決定する重要な要素は、聴覚性で、その次に継続性、評価性が続く。従って、日本語オノマトペの動詞化に関わる意味要素は、聴覚性 > 継続性 > 評価性の3つの素性が階層構造を成していると言える。一方、韓国語では、継続性が最も重要な要素として働き、日本語で動詞化形式を決める最も重要な聴覚性は、韓国語ではそれほど重要ではない。唯一関わっている *-hata* も日本語ほど明確な要因にはなっていない。継続性、反復性を帯びる *-kelita/-tayta/-ita* のうち、*-tayta* は評価性と強く結びついており、対象への非難、軽蔑など否定的な意味を表すことが多い。これらの考察の結果から、本論文の形態統語的統合性の議論の土台として、日韓オノマトの動詞化体系を明らかにし、統語と意味の対応関係を示すことができる。

### 第4章 オノマトペの統語分布の全体像

本章では、日韓両言語の統語と意味の全体的な体系を明らかにし、各統語形式の形態統語的統合性の度合いを示す。具体的には、(i) 日韓オノマトペにおける形態統語的統合性の階層を提示し、(ii) 「意味的特定性」という特徴から、日韓オノマトペにおける動詞化可能なものと不可能なものに分

布を包括的に捉え、一般化を試みる。(iii) さらにオノマトペの意味拡張とオノマトペの形態統語的統合性の関係に注目し、メタファー拡張と形態統語的統合性の間に相関関係が認められることを示す。結果として、(a) 日本語オノマトペの形態統語的統合性の度合いは、独立用法<引用的副詞<裸副詞<動詞<形容詞と高くなる。韓国語オノマトペの統合性の度合いも類似する傾向を見せ、独立用法<副詞<動詞、形容詞と高くなる。(b) 意味的特定性が非常に高いものは、動詞が表す事象の一部を詳細に描写し、共起動詞と意味的に包摂関係を成すため、動詞を修飾する副詞として現れやすい。その一方で、特定性が非常に低いものは、事象の程度や頻度といった全体的な成り行きに関わり、意味的に一般副詞に近い振る舞いを見せる。以上の結果から、意味的特定性について両極にあるものは形態統語的統合性が低いという結論にたどり着く。(c) 韓国語オノマトペがメタファー拡張に対する強い選好を見せ、*-kelita/-tayta/-hata* 動詞がメタファー拡張のみに現れる。一方、日本語オノマトペは、韓国語オノマトペに比べ、メトニミー拡張を起こしやすい傾向にある。本章の考察は、オノマトペの動詞化とメタファー拡張は、相関関係にあることを示すものである。この議論は、第3章と第4章で示した、日韓オノマトペの意味と統語の連結関係が、意味拡張のタイプに関わっていることを示唆するものと言える。

## 第5章 オノマトペの口語性と統合性の相関関係

本章と第6章では、第3章と第4章で行った文法的生起可能性に基づく考察において、類似した傾向を見せた日韓オノマトペが、各母語話者による日常生活のインフォーマルな会話場面ではどのように使われるのか、また言語間の違いがあるのかという2点を中心に議論を行う。本章では、擬音語と擬態語という意味的な面と、口語/文語という異なるレジスターと形態統語的統合性の関係について考察を行う。擬音語より擬態語において、文語より口語において、日本語より韓国語において、述語用法が好まれる。これらの結果は、(a) オノマトペの形態統語的統合性に類似性が影響しているという Akita (2009; 2013b) の説を支持するものである。また、(b) オノマトペの文法的実現の可能性と、実際の発話場面ではどのように使われ、どのようなものがより選好されるのかということは、必ずしも直結するわけではないということ、(c) 韓国語オノマトペが日本語オノマトペに比べ、形態統語的統合性が高いということを示唆するものである。本章の考察により、形態統語的統合性と相関する言語的特徴として、口語性を提示することができる。口語性が高い文脈では、既存の文法制約が保たれにくく、こうした傾向は韓国語より日本語において顕著である。すなわち、口語性が持つ制約緩和が原因となり、その副産物としてオノマトペの形態統語的統合性が高くなると考えられる。

## 第6章 オノマトペの非慣習性と統合性の相関関係

本章では、口語におけるオノマトペを、その韻律的、形態音韻的特徴から慣習的なものと非慣習的なものに分け、それぞれにおける形態統語的統合性との関係について明らかにする。非慣習的なオノマトペは、韻律的、形態音韻的特徴に基づく表出性を帯びるもの(例:「ばーっと」「がりがり

がりがり」、*ccwuwuk*〈ずら一と〉*ttatatatatatatata*〈だだだだだだだ〉と、新奇な音使いのもの（例：「きらひら」、*emwulltengemwullteng*〈うやむや〉）に分けられる。前者はより普遍的、後者はより個別言語的な性質のものであるが、これらはどれも言語の「写実 (depiction)」としての特徴から捉えられるものである。考察の結果として、表出性と新奇性は形態統語的な側面と密接な関係を持ち、表出性あるいは新奇性の特徴を有するものほど、副詞などの非述語形式として現れやすいということがわかった。日本語オノマトペは、柔軟性の高い統語的、意味的な振る舞いを見せる一方、韓国語オノマトペは、慣習性に対する高い志向性を見せる。本章の考察は、第5章の考察の結果と同様、オノマトペの文法的可能性とそれが実際にどのように使われるのかは、必ずしも一致しないということを示すものである。この結果は、オノマトペの形態統語的統合性を議論する上で、文法的生起可能性に基づく検討と実際の使用場面での観察に基づく検討は区別すべきだということを示唆する。

## 第7章 結論

本章の考察から次のような結果が得られた。(a) 意味的特定性が非常に高いか、あるいは非常に低いオノマトペは、形態統語的統合性が低い(第4章)、(b) メタファー拡張を起こすオノマトペは、形態統語的統合性の高い動詞として現れやすい(第4章)、(c) 口語性が高いと、形態統語的統合性が高い(第5章)、(d) 非慣習性(表出性、新奇性(韓))が高いと、形態統語的統合性が低い(第6章)。以上の結果に基づき、韓国語オノマトペは日本語オノマトペに比べ、形態統語的・語彙的に言語体系に深く統合されているという結論を導き出した。

日韓両言語における言語的統合性の差を、語彙的な面から見つめ直した結果、韓国語オノマトペには、慣用句化したオノマトペが多数存在すること(例：*Yengswu-nun cinho-ekey cilcil kkullyetanyess-ta* (直訳) ヨンスは、ジンホにずるずる引きずられた<振り回された>)) や色、味、匂いを表す語類の中にオノマトペ体系と音韻的、形態的特徴を共有する語が多いことがわかった(例：*{khemkhem/kkemkkem}-hata*〈真っ黒だ〉)。これらの結果は、第3章から第6章までの考察から明らかになった、韓国語オノマトペにおける高い言語的統合性を傍証するものである。

最後に、日韓両言語の歴史的事実を基に、オノマトペの言語的統合性に関する仮説を示し、言語間に言語的統合性の差を生む背景要因について、様々な角度からいくつかの仮説を提示する。具体的には、言語進化論、統語類型論、意味類型論、表現構造の類型論に着目した5つの仮説である。